

# 研究結果報告書

## 中国における日本の武士物語の受容と中国人の対日観

所属：中国社会科学院 日本研究所

役職：助理研究員

氏名：張 梅

- ①研究の目的：この研究は、武士に関するコンテンツを文化製品（cultural product）と見なし、二つの質問に答える。まず、戦後、日本人はどのようなふうで武士の物語を語り継いできてきたのか、次に、日本の武士の物語は中国の若い人たちの対日観や対日感情にどんな影響があるのか。
- ②研究のための活動内容：井上靖の小説『戦国城砦群』を翻訳して、重慶出版グループに出版してもらった。2019年11月に重慶出版グループを訪問して、日本の戦国時代の小説の中国での出版状況を聞いてみた。四川外国語学院、西南民族大学の日本語学科の先生や学生と座談をし、なぜ多くの中国の若い人が武士の物語を好むかということについてインタビューした。重慶と成都の本屋を訪ねて、日本関係の書籍の出版事情を調べた。そのほか、北京市、山東省の若い人たちにインタビューし、彼らの対日観を考察してみた。
- ③海外での具体的な研究活動：2019年4月に日本を訪問して調査を行った。まず、図書館で武士道の歴史や思想の特徴に関する資料を収集した。そして、早稲田大学の谷川健司教授と学術的交流を行い、外務省、経済産業省の人たちに面会して日本の流行文化の輸出政策を聞いてみた。日本人の読者や視聴者にインタビューして、武士関連のコンテンツに対する感想を聞いてみた。
- ④研究を通じて発見・解明された内容：1) 中国の若い人が武士の物語を好む理由は主に四つ：三国の英雄たちの物語と似ていること、日本の歴史を知りたがること、出世できるこつを探すこと、人情味のあること（例えば、映画『たそがれ清兵衛』）など。2) 武士の物語は、クールジャパンという戦略において、伝統的な要素もありながら、現代のコンテンツによって常に再解釈されているという位置づけである。それは若い人の対日観に影響を与えている。ある消費者によると、幼い頃に見た抗日戦争物語映画で、日本という国に嫌悪感を抱いていたが、日本の武士物語を含むコンテンツを見ることで、日本に対する好感が生まれた。それを手がかりに、日本がどのような国で、日本人がどのような人なのかを深く探りたくなり、結局「善悪」と簡単に二分できない、総合的で客観的な認知を形成するようになったという。
- ⑤研究を通じて見えた課題：今後武士の物語がいかに欧米で受容されているのか、中国とどう違うか、を考察していく。

研究成果の公表について（予定も含む）

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

「日本の文化輸出政策について」、張梅、日本文化講座、2019年11月15日、重慶市

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

「日本の文化輸出戦略について：その多元的な実施主体と国家構築の経路」張梅、『日本問題研究』、2020年第2期

「伝統的な文化のシンボルと安倍政府による日本のナショナル・アイデンティティの構築」張梅『東北亜学刊』2020年第4期

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

『戦国城砦群』井上靖（張梅訳）重慶出版グループ 2020年1月